第四講『折たく柴の記』　法政大学

つぎの文章は新井白石『折たく柴の記』の一節である。本文中の「予洲」とは、新井白石の父が仕官していた土屋家の主人頼直をさす。これを読んで後の問いに答えよ。

我二十三歳の夏の頃、ア予洲の家滅びしかば、*前にしるせし事のごとく、イ我が仕への途もおのづからひらけたり。かくて、筑前守紀正俊朝臣にすすめしものありて、二十六歳の三月に、ウ彼の朝臣のもとに出でて仕ふ。一年を隔てて、我二十八歳の秋、*筑州の事おはしまして、その嫡男下総守正仲朝臣、彼のあとをつが①れしかど、不幸の事のみ打ち続きて、後にはエ家人等を扶助すべき事も意のままならず。皆々その禄米を減ぜられしほどに、禄を辞し去るものどももすくなからず。オ我はじめ出で仕へしよりこのかた、彼の父子にしられし身にもあらねど、およそは［A］となり、［B］となれ②るものの、1かかる時に至りて、はなれさるべき事にあらずと思ひ③しかば、わづかに*妻孥の餓ゑをまぬかるるのみにて、2心にもあらぬ仕へにしたがひゐたり。されど、いとま多かる身なりしかば、この時にこそ*経史の類をも渉猟せし事はありつれ。貧は士の常などいふ事あれば、私の事においては、いかにも堪へ忍びしかど、仕へにしたがふ身には、そのほどにつけてなすべき

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

事ども多ければ、つひには財尽き力窮りて、三十五歳といひし春に至りて、ありし事ども書きあらはして、身のいとまを給はるべき由を申す。したしかりしものどもには、かねてよりかく思ひたちし事を語りたりけるに、「禄米あれば、餓ゑに死するまでの事はあらず。かくまで財力尽きはてし人の、禄をも辞して去らむには、一日の餓ゑをすくふべき助けもあらじ。3我が身こそかくまで思ひたち給ひたれば、いかにもおはすべき事なれ、若き妻幼き子どもの事をば、いかにし給ふべき」など、いふ事どもありしかど、「4頼みし人の不幸の事どもおはしまさずは、我今までかくてはあるべからず。この年頃、堪へがたき事をも堪へ、忍びがたき事をも忍びしは、［A］となしまゐらせ、［B］となりし所を思ひしがゆゑなり。けふ禄辞し去りて、あすは妻孥等皆々はなれ散りな④むをもて、我が志のほどは見ゆべき事ぞかし。天もしものしり給ふ事あらむには、それまでの事もあらじものを」といひけり。*総州もいかに思ひ給ひし⑤にやあるらむ、のたまひ出す旨もなく、春すぎ夏たけて、のたまふ事どもありて、「ただいかにもして我が家を去らむ事、思ひとどまるべし」とありしに、されど、また申す旨ありしほどに、秋の初めに至りて明卿（あきのり）生まれたりけり。

そのほどすぎて、つひに我が請ふ所を許さる。この時におよびて、家に余れる資財をはかり見しに、*青銅三百疋、白米

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

三斗には過ぎず。「よしよし、忽ちに餓うるまでも事もあらじ」といひて、妻孥引きぐして、年頃*師檀のゆかりにつきて、高徳寺にゆき至り、やがて浅草のほとりに宅借りて移れり。なほ一僕一婢のあひ随ひしをも、めしつかふべき助けもなし。「いかにもなりゆけ」といひしに、「おのれら習はぬわざをもなして口もらふほどの事をばいとなみなむ。いかでかはなれまゐらすべき」といふなり。かかりしほどに、総州の舎弟のもとより、使ひして、「さておはさんほどは、一家の人、やしなはれん所をばまゐらすべし」といひ贈り給ひたりけり。是は年頃学文の事など、導きまゐらせし所を、思ひ給ひしがゆゑなるべし。思ひがけぬ事も出で来たれば、その秋の末に、居所をも城東に移したりしに、来り学ぶものも日々に多く、しかるべき人々も、就きて学ばれしすくなからず。

（『折たく柴の記』による）

注

*前にしるせし事　土屋家の家中に、頼直の行状が良くないので、かわってその子を当主にしようとする動きがあったが失敗に終わり、白石の父もその仲間と見なされたため、白石も仕官の道を閉ざされた。その後、当主が変わり、白石にもふたたび仕官の道が開けたことを指している。

*筑州の事　筑前守紀正俊が若年寄稲葉正休により江戸城中で刺され、死亡した事件。

*妻孥　妻子、家族。孥は子供。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

＊経史　中国の書物である経書と史書のこと。
＊総州　下総守正仲。
＊青銅　銭の異名。
＊師檀　寺とその檀家。

問一　傍線部①「れ」②「る」③「しか」④「む」⑤「に」の助動詞の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選べ。

ア　完了　　イ　過去　　ウ　尊敬　　エ　受身　　オ　可能
カ　断定　　キ　推量　　ク　打消

①＝　　②＝　　③＝　　④＝　　⑤＝

問二　傍線部1「かかる」は破線部ア〜オのどの内容をさしているか。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　予洲の家滅びしかば
イ　我が仕への途もおのづからひらけたり
ウ　彼の朝臣のもとに出でて仕ふ
エ　家人等を扶助すべき事も意のままならず
オ　我はじめ出で仕へしよりこのかた

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部２「心にもあらぬ仕へにしたがひゐたり」の解釈として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　怒りを抑えながら貧しさに耐えていた
イ　不安な気持ちで出仕をひかえていた
ウ　同情を感じながら忠誠を尽くしていた
エ　心ない仕打ちを受けても出仕していた
オ　不本意にも出仕を続けていた

問四　傍線部３「我が身こそかくまで思ひたち給ひたれば、いかにもおはすべき事なれ」の解釈として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　あなた自身は、これほどまでに決心されたのだから、どのようにも生きていけましょうが
イ　あなた自身は、このようにしてあきらめられるのなら、どのようにもおなりになれましょうが
ウ　あなた自身は、それほどまでに出世されたのだから、どのようにもお取りはかりいただけるでしょうが
エ　あなた自身は、このように覚悟されたのだから、どのような恥辱にも耐えられましょうが
オ　あなた自身は、このように思い切ってしてしまえば、どのようなお咎めをうけてもよいでしょうが

問五　空欄［Ａ］・［Ｂ］に共通して入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選べ。

ア　Ａ父子・Ｂ妻孥　　イ　Ａ妻孥・Ｂ父子　　ウ　Ａ従者・Ｂ主
エ　Ａ主・Ｂ従者　　オ　Ａ家人・Ｂ人家

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部４「頼みし人」に該当するものを次の中からすべて選べ。

ア　筑前守紀正俊朝臣　　イ　下総守正仲朝臣
ウ　妻孥　　エ　したしかりしものども
オ　かくまで財力尽きはてし人

問七　傍線部５「いかでかはなれまゐらすべき」を二十字以上、三十字以内で現代語訳せよ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問八　この作品は江戸時代に書かれた随筆だが、次の中から江戸時代に成立した作品ではないものを一つ選べ。

ア　玉勝間
イ　曾根崎心中
ウ　世間胸算用
エ　無名草子
オ　野ざらし紀行

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　復習問題

①「とみのこととて」の解釈として最も適切なものを次の中から選べ。

イ　先に決まっていた予定があるので
ロ　都見物に出かけるので
ハ　遺産相続に関する相談があるので
ニ　火急の用事があるので
ホ　跡目選びの問題があるので

②「年ごろの行ひの徒らになりなん」の解釈として最も適切なものを次の中から選べ。

イ　数年来のつきあいがむなしいものとなった
ロ　長年の修行が無駄になってしまうだろう
ハ　年配の人の経験が役に立たなくなってしまう
ニ　ここ数年の間に親しい人が亡くなってしまった

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③「とかくこのよは仮りのよぞ。道心おこせ」の傍線部の「よ」と「おこせ」の漢字の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　夜・起こせ　　ロ　夜・熾こせ　　ハ　世・発こせ
ニ　世・遣こせ　　ホ　予・興こせ

④「九日の節」とは何か。正しいものを次の中から一つ選べ。

イ　中秋　　ロ　上巳　　ハ　踏歌　　ニ　端午　　ホ　重陽

⑤人物伝中心に歴史を語る『大鏡』の中で、派生的なエピソードの語りを受け持つ人物は誰か、次の中から一つ選べ。

イ　夏山繁樹　　ロ　侍　　ハ　翁　　ニ　大宅世継　　ホ　嫗

⑥『古来風体抄』の筆者とはどのような人物か。合致するものを次の中から一つ選べ。

イ　『金葉和歌集』の撰者である藤原顕輔の子で、『詞花和歌集』の撰者である。
ロ　『千載和歌集』の撰者である藤原俊成の師で、『金葉和歌集』の撰者である。
ハ　『新古今和歌集』の撰者の一人である藤原定家の父で、『千載和歌集』の撰者である。
ニ　『金塊和歌集』の撰者である源実朝とは兄弟で、『新古今和歌集』の撰者の一人である。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑦「沙石集」と同じジャンルのものを次の中から一つ選べ。

イ　日本霊異記　ロ　菟玖波集　ハ　愚管抄　ニ　明月記　ホ　無名抄

⑧新井白石の著作として適切なものを、次の中から一つ選べ。

イ　万の文反古　ロ　花月草紙　ハ　折たく柴の記　ニ　英草紙

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第四講】

〔模範解答〕

問一　①ウ　②ア　③イ　④キ　⑤カ
問二　エ　**問三**　オ　**問四**　ア　**問五**　エ　**問六**　ア、イ
問七　どうしてこの家を離れ申し上げましょうか、いや、離れられない（二十九字）
問八　エ

〔現代語訳〕

私が二十三歳の夏の頃、予洲の家が落ちぶれたので、前に記したとおり〔＝注釈参照のこと〕、自分の仕官の道も自然と開けた。このようにして、筑前守紀正俊朝臣に（私を）薦めたものがいて、二十六歳の三月に、この朝臣のもとに出仕した。一年が経ち、私が二十八歳の秋に、筑州の事〔＝注釈参照〕がおありになって、その長男の下総守正仲朝臣が、彼の跡をつぎなさったのだが、不幸の事ばかり続いて、後には（正仲は）家人たちを扶助すべき事も思いのままにならない。皆々その禄米を減らされたときに、給料を辞退し去るものたちも少なくない。私は最初に出仕してからこれまで、この親子に知られた身分ではないが、大まかに言って（この二人は私の）主となり、（私は）従者となったが、このような時に至って、（この家を）離れ去るべき事ではないと思ったので、わずかに妻子の餓えを免れるのみで、不本意にも出仕を続けていた。しかし、暇が多い身であったので、この時に経史の類をも読みあさることができた。貧しいことは武士の常などという事もあるので、自分自身の事においては、どのようにでも堪え忍んだが、出仕の身なので、その身分であればなすべき事が多いので、結局財産は尽き力も限界で、三十五歳の春に至って、今までの事なども書き表し、身の暇をいただくべきことを申し上げる。親しかったものたちには、以前からこのように思い立っていた事を語っていたが、（親しいものは）「禄米があれば、餓えて死ぬまでの事はない。ここまで財産が尽きはてた人〔＝白石〕が、給料も辞してもし去るならば、一日の餓えを救うべき助けもないだろう。あなた自身は、これほどまでに決心されたのだか

ら、どのようにも生きていけましょうが、若い妻や幼い子供の事を、（あなたは）どのようにしなさるつもりですか」などと、言うものたちがいたが、「頼りにしていた人〔＝主人たち〕の不幸な事などがおありにならなければ、私は今までこのようにはいなかったであろう。この長年、堪えがたい事をも堪え、忍びがたい事をも忍んだのは、（私がご主人様たちのことを）主となし申し上げ、（自分が）従者となったことを考えたからである。今日給料を辞していらっしゃるならば、それほどまでのことにもならないだろう」と言った。正仲朝臣もどのように考えなさったからであろうか、おっしゃることも特になく、春がすぎて夏深くなって、おっしゃることなどがあって、「ただなんとかして我が家を去るような事を、（お前は）思いとどまれよ」とあったが、そうではあるが、また（私が辞職のことを）申すことがあったところに、秋の初めにいたって明卿が生まれた。

その期間をすぎて、やっと私がお願いする所〔＝辞職すること〕を許された。この時に、家に残っている資財を確認すると、青銅が三百疋、白米が三斗に過ぎない。「よしよし、すぐに餓えるということまででもないだろう」といって、妻子を引きつれて、長年の寺とその檀家の縁によって、高徳寺に行き、そのまま浅草のほとりに家を借りて移った。依然として下男と下女が従っていたのを、召し使う助けもない。（そこで、私が下男下女に）「（この家を出ていき）どのようにでもなれ」と言ったところ、（下男下女は）「私たちは慣れないことをもして何かしらの用事を必ず営みましょう。どうして（この家を）離れ申し上げましょうか、いや、離れられない」と言うのである。このようなほどに、正仲の弟のもとから、使いがきて、「そのように（あなたが）いらっしゃる時分は、家族の人を、（あなたが）養いなさるような所を（私が）差し上げましょう」といい、贈りなさった。これは長年学文の事など、（私が）お導き申し上げたことを、思いなさったからであろう。思いがけない事も出てくるので、その秋の末に、居所も城東に移ったところ、来て学ぶものも日々増えて、しかるべき人々も、就いて学ぶものが少なくない。

〔重要単語〕

○おのづから【自ら】…①**自然と。**　②**偶然。**　③**ひょっとして。**

○ほど【程】…①**程度。**　②**時間。**　③**空間**（距離・広さ）。　④**身分。**

○ぐす【具す】…**一緒に行く。**

復習問題　第四講　解答解説

〈解説〉

① 「とみ」は重要単語で、「急」の意味。よって、正解はニ。

② 「年ごろ」・「行ひ」も重要単語で、それぞれ「長年」・「仏道修行」の意味。単語だけでも解けますが、「なん（＝なむ）」の識別に注目してみると、四段動詞「なる」の連用形についているので、確述用法。「完了」ではなく「強意」なので、まだ終わっていない。よって「〜た」という訳になっているイとニは少なくとも削れたはず。全てをきちんと踏まえた解釈はロ。よって、正解はロ。

③ 「道心おこす」は「発心」のことなので、「発こす」が正しい。よって、正解はハ。出家関係の古文常識や単語を、きちんと押さえておくこと。

④ 「九日」なので九月九日の「重陽の節句」のこと。よって、正解はホ。ちなみに、イ「中秋」は八月十五日。ロ「上巳」は三月三日。ハ「踏歌」の節会は正月行事。「男踏歌」は一月十四日か十五日。「女踏歌」は一月十六日に行われた。ニ「端午」は五月五日。ハ「踏歌」以外は知っておくべきである。

⑤ 『大鏡』の語り手なので、イ「夏山繁樹」か、ニ「大宅世継」であることはわかってほしい。本設問は、さらに「派生的なエピソードの語りを受け持つ人物」まで問うている、なかなかマニアックな文学史問題である。が、『大鏡』が別名として『世継物語』や『世継の翁が物語』と呼ばれていることを知っていれば、派生的なほうが繁樹ではないかと予測はできるはず。正解は、イ「夏山繁樹」。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑥『古来風体抄』は藤原俊成の歌論書。よって、正解はハ。ちなみに、イ、ロの『金葉和歌集』の撰者は源俊頼。

⑦『沙石集』は、鎌倉後期の仏教説話集。よって、正解はイ（『日本霊異記』は、平安初期の仏教説話集）。ちなみに、ロ『菟玖波集』は、南北朝期の連歌集。ハ『愚管抄』は、鎌倉前期の歴史書。ニ『明月記』は、鎌倉時代・藤原定家の日記、ホ『無名抄』は鎌倉時代・鴨長明の歌論書。

⑧新井白石の随筆は、『折たく柴の記』。よって、正解はハ。ちなみに、イ『万（よろづ）の文反古（ふみほうぐ）』は、江戸中期・井原西鶴の浮世草子。ロ『花月草紙』は、江戸後期・松平定信の随筆。ニ『英草紙（はなぶさそうし）』江戸・近路行者（＝都賀庭鐘（つがていしょう））の読本。ハはもちろんのこと、ロも知っておくべき（イ・ニはいらない。ただし、井原西鶴の浮世草子「好色物」（『好色一代男』など）や、「町人物」（『世間胸算用』・『日本永代蔵』など）の知識は必要）。

〔解答〕

①ニ　②ロ　③ハ　④ホ　⑤イ　⑥ハ　⑦イ　⑧ハ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。